



HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Suruga-ku Shizuoka-shi Shizuoka-ken 422-8526 Japan

inside NEWS



CONTENTS

オープンキャンパス.....	1	研究者紹介.....	14
県民の日イベント.....	2	研究助成等採択.....	14
ファーマカレッジ2005.....	3	受賞.....	15
夏休み親子環境教室.....	3	奨学金授与.....	16
国際交流.....	4	人生で感動したこと.....	19
名誉教授の称号授与.....	5	クラブ・サークル紹介.....	21
教員の人事.....	7	図書館だより.....	23
著書紹介.....	8	谷田風土記.....	27
部局の動き.....	9		

県立大学を体感！オープンキャンパスを開催

本学への入学希望者などを対象に、各学部の説明や大学施設を紹介するオープンキャンパスが、8月1日(月)から3日(水)にかけて開催されました。

1日は薬学部と国際関係学部が、2日は食品栄養科学部と経営情報学部が、3日は看護学部が、それぞれ趣向を凝らしたプログラムを実施し、3日間で延べ2,600名が参加しました。

まず、大講堂で学部・学科の特徴やカリキュラム、入学者選抜方法などについて説明した後、各学部棟などで、施設見学や模擬授業、

懇談会などを行いました。

図書館や研究室、実験室で機器や研究内容の説明を受けたり、模擬授業や模擬実習を体験したり、また教員や在学生の生の声を聞いたり、参加者にとって、大学を直に体感できる良い機会になったのではないのでしょうか。

また、入試や学生生活に関する相談コーナーも設けられ、入試過去問題の配布や、履修要項・下宿情報の閲覧、入試や奨学金に関する個別相談など、多くの来場者で賑わいを見せていました。



県民の日イベント

明治9年8月21日に静岡県が誕生したことを記念し、平成8年度に制定された「県民の日」の諸行事が、8月21日(日)を中心に県内各地で開催された。本学では、大学構内見学会の「キャンパス・ツアー」と「環境科学研究所の一般公開」が行われた。

探検・発見・体験「キャンパス・ツアー」を開催!

キャンパス・ツアーは、県民の方々や将来大学に進学を希望している生徒に対してキャンパスを見学していただき、県大に親しみを持ってもらうことを目的に開催しています。

本年は8月19日(金)にキャンパス・ツアーを開催し、県外からは茨城県、三重県等から、また、県内各地から参加があり、小・中・高校生から、御高齢の方まで、募集人員を超える70名の参加がありました。参加者は3グループに分かれて大学職員の誘導により各学部棟や図書館を見学しました。実習室、研究室では、教員から説明を受けたり、LL教室では模擬授業を、また、遠隔講義システムを体験し、県大の設備や研究内容などに感心していました。

また、本年は、高校生の希望者を対象に、施設見学の後に入試・学部説明を行いました。

参加者からは、「充実した一日だった。」「機会があればまた訪れたい。」などの声が聞かれました。



身の回りの環境問題を楽しく学ぶ・環境科学研究所を一般公開!

環境科学研究所では、研究所の研究活動内容を県民の方々に広く知っていただき、また、環境問題に対して理解を深めていただけるよう、8月20日(土)に一般公開を行いました。13の研究室では、それぞれ研究内容を展示、解説し、身の回りの環境問題を身近に学ぶ簡単な実験を行いました。当日の朝、雷雨があったにもかかわらず、幼児から御高齢の方まで150名の方が御参加くださいました。積極的に実験に参加される方、教員や大学院生の説明に熱心に耳を傾ける方、質問を熱心にされる方など様々な光景が見られ、「研究内容がとてもおもしろく興味がわいた。」「親切にわかりやすく説明してくださり、楽しめた。」「実験がおもしろかった。来年も来たい。」などの声が聞かれました。



ファーマカレッジ2005 体験してみよう！「病気を治す薬の開発」

県内高校生を対象とした「ファーマカレッジ」は、本年度で7年目となり、夏休み期間中の8月3日、4日の2日間で実施されました。

高校生が大学の研究者や大学院生から直接指導を受け、実験や実習を通じて最新の知識と技術にふれながら、薬学の世界を体験する機会を提供するものです。

例年、多くの参加希望者があり、本年度も選考により、予定より6名多い36名に参加してもらい、「薬の体内での動きを知ろう」など6名ずつ、6つの体験テーマに分かれ、課題研究、研究発表を行い、薬学に対する興味や理解を深めてもらいました。



親子で実験に挑戦！夏休み親子環境教室

8月27日(土)に、環境科学研究所主催の夏休み親子環境教室が開かれました。これは、環境問題の解決には小学校から興味を持って頂くことが重要という認識から、研究所の若手教員を中心に昨年度から始めた事業です。また、理科離れ対策が叫ばれる中、実験を通して楽しみながら勉強して頂くことも目的の一つです。

今年は、小学生とその保護者18組43名の参加者があり、いろいろな実験に挑戦して頂きました。1. 廃油から石けんを作ろう - 使用済みの天ぷら油等を流しに捨ててしまうと河川の汚染などを



引き起こしてしまうので、リサイクルを考えてみる実験です。2. 花火で酸性雨について学ぶ - 花火などの燃焼行為が酸性雨へとつながっていくことを体感して頂く実験です。花火も作って頂きました。また、花火の色がどのようにつくのかも見て頂きました。3. 日光写真を作る - 日光の力を利用して、絵を写真にする実験です。オゾン層破壊について学びながら、日光の力を実感して頂きました。4. 河川水中の微生物を顕微鏡で観察する - 河川水の自浄力は微生物のおかげです。5. 河川の水質を簡易パックで測る - 巴川の上流、中流、下流の汚れ具合を簡易パックで測定する実験です。6. マンガン乾電池を作る - 牧ノ原の河川では、マンガンが表面に析出した黒い石が発見されています。身の回りにあるマンガンを使って、マンガンの力をみて頂く実験です。7. 大きいシャボン玉を作る - 界面活性剤の力を実感する実験です。8. 二酸化炭素ってどんな気体 - 地球温暖化問題では二酸化炭素が問題となっていますが、呼気に非常に多く含まれること、そのほかいろいろな発生源があること、地球上で循環していることなどを考える実験です。

アンケートから察するに、自分で試薬を測りったり、煮たり焼いたり、環境問題を感じながら楽しい一日となったようです。

フランス・リール政治学院と大学間協定を締結

本学では、フランスのリール政治学院（Sciences Po - Lille；ジャン＝ルイ・ティエボー学長）と学生の相互交流について協議を進めてきたところ、このたび協議が整ったため、大学間交流協定を締結しました。海外の大学等との交流協定の締結は、リール政治学院が9校目となりますが、フランスの大学とは、初めての協定締結となります。

協定締結に至る経緯としては、平成16年5月、フランス大使館文化部主催による日仏高等教育機関の担当者交流会が開催され、国際関係学部の剣持久木助教授が参加し、社会科学、人文系の各機関と折衝を進めたところ、リール政治学院と相互の状況やニーズで一致する点が見られたため、担当者間で交換留学が可能な形での大学間協定締結へ向けての交渉を開始することを確認しました。その後、同年9月に剣持助教授が同学院を訪問し、学長等と会談し、具体的に協定締結に向けた手続きを進めてきたものです。

同協定は、両大学間の高等教育における研究・

教育分野での協力関係の確立を目的とし、学生の交換留学が主な内容となっています。

平成17年6月6日、西垣学長が協定書に署名し、郵便交換によりジャン＝ルイ・ティエボー学長が平成17年7月4日、協定書に署名を行い、協定を締結しました。

なお、平成17年9月から本学の2名の学生が交換留学生としてリール政治学院へ派遣されています。



薬学部とタイ王国国立マヒドン大学 熱帯医学部・薬学部が学部間協定を締結



薬学部（三輪匡男学部長）は、8月8日、タイ王国国立マヒドン大学熱帯医学部及び薬学部との間で学術交流に関する学部間の交流協定を締結しました。

調印式は、本学から薬学部長、薬学研究科長ら4名が訪タイし、熱帯医学部長、薬学部長ほか学部教員出席のもと、バンコク市内マヒドン大学で行われました。

薬学部は、この協定に基づき、教員や学生の交流、共同研究やシンポジウムの提携、研究論文等の情報交換等で連携していきます。

マヒドン大学は、医薬系の学問の評価が高く、この学術交流により、薬学教育の一層の充実を図っていくこととしています。

名誉教授の称号授与



廣部 雅昭 先生
(前静岡県立大学長)

廣部雅昭前学長は、平成11年1月の本学学長選挙において、学長候補者に選ばれ、平成11年4月に第3代学長に就任されました。その後、平成15年1月の本学学長選挙において再任され、平成15年4月から平成17年3月まで引き続き学長を務められ、本学規程に基づき、平成17年3月末に任期満了により退官されました。

この間、平成12年4月には大学経営会議及び学長企画室の設置、各種委員会の再編・新設をされるなど、大学改革の先鞭ともなる大学運営体制を確立されました。

また、本学の研究活動を発展させ、現代韓国朝鮮研究センター、創薬探索センター及び地域経営研究センター等の附属研究施設の設置充実を図られるとともに、学生のキャンパスライフの向上を目指して、健康支援センター及び情報センターの設置にも御尽力されるなど、本学の教育研究体制の充実強化を実現されました。

さらに、平成13年10月からは毎年、静岡県立大学学術フォーラム（USフォーラム）を開催され、本学教員に対する有意義な発表・研修の機会を設けられました。

特に、廣部前学長の御指導の下、平成14年10月には本学の「先導的健康長寿学術研究推進拠点」プログラムが文部科学省の21世紀COEプログラムに採択され、平成16年11月の中間評価では、公立大学としては唯一、最上位にランクされるなど、本学研究レベルを全国的な評価において高める多くの研究成果を創出するなど多大の貢献をなされました。

学外の活動においても、日本薬学会会頭、独立行政法人医薬品・医療機器総合機構運営評議会議長、しずおか産業創造機構理事、(財)静岡総合研究機構理事及び静岡文化芸術大学評議員等数多くの委員を務められ、静岡県のみならず、全国的に計り知れない社会貢献をされました。



鈴木 邦夫 先生
(前薬学部教授)

鈴木邦夫前教授は、昭和15年茨城県に生まれ、昭和35年4月茨城大学文理学部理学科に入学、昭和39年3月に同大学（化学専攻）を卒業後、中外製薬(株)に入社し、総合研究所で研究業務に従事されました。その後、昭和41年6月静岡薬科大学に助手(薬品製造化学教室)として任用され、同大学において、昭和47年4月に講師、昭和59年7月に助教授に昇任されました。さらに、昭和60年8月に教授に昇任され、一般教養の化学教室を主宰されました。この間、昭和47年には静岡薬科大学から薬学博士の学位を授与されるとともに、昭和62年4月には、静岡薬科大学と静岡女子大学の統合拡充によって新設された静岡県立大学国際関係学部教養科教授に転任され、薬学部および食品栄養科学部学生の化学教育に尽力されました。その後、平成8年には教養科の廃止に伴って、薬学部に移任、有機合成化学研究室を主宰され、学生の教育、研究に尽力されました。

同教授は、後に光延反応試薬として有名になった diethyl azodicarboxylate (DEADCAT) の量子化学計算に基づき、その水素引き抜き能を初めて発見されました。また、静岡薬科大学着任以来、有機合成化学分野で新しい有機合成反応の開発に努め、ギ酸還元反応や脱炭素反応のほか有機硫黄化学分野で目覚ましい成果を挙げ、学術研究に大きく貢献されました。これらの研究成果に対して、昭和53年には東海化学工業会賞を、昭和56年には知恩会斎藤奨励賞を受賞されました。

また、学内にあっては、教養科時代には学生部委員会、図書委員会、バイオハザード実験センター運営委員会委員等を務め、全学的に大学運営に貢献されました。また、薬学部には教務委員、学生委員、就職委員、日本育英会委員等を務められました。

さらに、学外においては、日本薬学会東海支部幹事を務められるとともに、昭和57年6月から昭和58年5月まで米国ペンシルバニア州ピッツバーグ大学へ博士研究員として留学され、ザルコマイシンの全合成その他の研究に従事し、大きな成果を挙げるとともに、その経験をその後の教育、研究に生かされました。



大石 悦男 先生
(前環境科学研究所・大学院
生活健康科学研究科教授)

大石悦男前教授は、昭和41年3月に静岡薬科大学大学院博士課程を中退後、同年4月に静岡薬科大学薬化学教室に助手として採用され、昭和44年7月に論文題目「Phthalazine誘導体に関する研究～Carbanionによる求核反応について～」により薬学博士の学位を授与されました。その後、昭和50年4月に静岡薬科大学薬化学教室講師、昭和56年4月には同教室助教授に昇任され、昭和62年4月静岡県立大学薬学部に移籍されました。この間、有機化学、無機化学の講義を担当され、また多くの卒業論文、修士論文に係わる研究指導に当たられました。さらに、平成3年4月に静岡県立大学大学院生活健康科学研究科が新設されるにあたり、同研究科環境物質科学専攻の有機合成化学研究室(平成7年度より反応化学研究室となる)の主任教授に任用され、環境化学特論、反応化学特論等の講義を担当されました。その後、平成9年4月、環境科学研究所が本務となり、以来一貫して含窒素複素環化合物に関する研究に従事し、新規化合物の合成、またそれら化合物の反応性の系統的解明に精力的に取り組まれました。特に、最近では、社会的問題となっているベンゾタイオキシノピリダジン誘導体(内分泌攪乱物質様誘導体)の化学的反応性及び変異原性の解明に取り組まれました。

学内では、評議員を2年間、公開講座実施委員長を6年、専攻長を2年間、務められたのはじめ、副専攻長、倫理委員、はばたき寄金運営委員等各種委員会委員を歴任され、大学の管理運営面において熱意をもって当たられました。特に、生活健康科学研究科、同博士後期課程、環境科学研究所の立ち上げに際し、多大に貢献され、環境物質科学専攻、環境科学研究所の礎をつくる功績を挙げられました。

学会活動では、日本薬学会、日本化学会、国際複素環学会(International Society of Heterocyclic Chemistry)等の会員として活躍され、国内および国際学会で研究成果を発表され、複素環化学の発展に寄与されました。

社会活動、対外活動としては、しずおか県民カレッジ・環境学習サポーター養成講座講師、県立大学公開講座および特別講座の講師を務められ、一般県民に環境化学物質に関する知識を広められました。



五島 廉輔 先生
(前環境科学研究所・大学院
生活健康科学研究科教授)

五島廉輔前教授は、昭和43年3月静岡薬科大学大学院薬学研究科博士課程を中退後、同年4月より同大学放射薬品学教室の助手に任用されました。“がん及び臓器の診断用放射性医薬品の開発”をメインテーマとして研究を続け、昭和54年12月、薬学博士の学位(静岡薬科大学)を授与され、昭和50年4月に静岡薬科大学講師に、昭和55年4月に同助教授に昇任されました。その後、昭和55年10月からアメリカ・ケンタッキー大学薬学部に1年間留学し、超短半減期核種である¹¹Cで標識したD-ロイシンの調製法及びその放射性医薬品への応用について研究されました。昭和62年4月には静岡県立大学薬学部に移籍し、放射薬品学、放射線作用学等の講義を担当されるとともに学部学生、大学院生の研究指導に従事されました。さらに、平成3年4月に静岡県立大学大学院生活健康科学研究科が新設されるにあたり、同研究科環境物質科学専攻の放射線生物学研究室の教授に任用され、放射線生物学特論、放射線化学特論等の講義を担当されました。平成9年4月には環境科学研究所教授が本務となりました。研究室開設当時は、放射線の人体への影響、特に微量放射線による放射線ホルミシス効果について研究し、その後、紫外線に関する研究をメインテーマとして、研究室を光環境生命科学研究室と改め、大学院生の教育や研究指導に精力的に取り組まれました。

学内活動では、環境科学研究所長を2年間、専攻長、副専攻長をそれぞれ2年間務めたほか、放射線安全委員会委員長、アイソトープセンター主任、アイソトープ運営委員会委員、広報委員会委員、保健衛生委員会委員、施設有効活用委員会委員などを歴任し、大学の管理運営に尽力されました。特に、同大学アイソトープセンターの設立時には、放射線取扱主任者として重要な役務を果たし、その後、平成11年3月まで放射線取扱主任者として同センターの安全管理に努め、平成7年11月には第7回科学技術庁放射線安全管理功労賞を受賞されました。

学会活動では、日本放射線影響学会、日本アイソトープ協会、日本薬学会、日本生化学会、環境科学会、日本膜学会等の会員として幅広く活躍されました。

社会活動・対外活動としては、静岡県原子力発電所環境安全協議会委員、静岡県環境放射能測定技術会委員、静岡県R I審査会委員、浜松市R I審議会委員、しずおか県民カレッジ・環境学習サポーター養成講座講師、静岡県立大学公開講座講師などを努められました。



相馬 光之 先生
(前環境科学研究所・大学院
生活健康科学研究科教授)

相馬光之前教授は、昭和37年3月東京大学理学部化学科卒業、昭和39年3月同大学院化学系研究科修士課程化学専門課程修了、昭和40年3月同博士課程を中退後、同年4月東京大学理学部化学科助手（化学反応研究室）に採用されました。その後、昭和54年4月環境庁国立公害研究所計測技術部主任研究官、平成7年4月公害研究所より名称を変更していた国立環境研究所化学環境部長を経て、平成8年4月静岡県立大学教授（大学院生活健康科学研究科環境物質科学専攻）に就任し、平成9年4月環境科学研究所の発足とともに同研究所教授（環境物質科学専攻兼任）となり、水質・土壌環境研究室、水質・土壌環境特論の講義を担当されました。

昭和51年から2年間オランダ、ライデン大学留学中に、ポリフィリンの励起三重項状態の磁気共鳴と蛍光による検出を手がける中で、励起状態動力学に新しい拓を開かれました。国立公害研究所(国立環境研究所)では底質・土壌の計測を中心に、環境固体成分の表面特異的な化学組成や化学反応の計測と実証、堆積物を用いた環境変動の解明の研究を進展させました。本学に赴任後は、堆積物中に残存する光合成色素を指標として内外の湖沼に応用した環境変動の解明法と、茶園地帯の土壌酸性化に付随する特徴的な物質動態や界面化学過程の把握に力を注ぎ、多大な成果を挙げられ

ました。

本学への赴任は、生活健康科学研究科における博士後期課程新設に伴うものであり、博士前期・後期課程学生の研究指導とともに、多くの学位論文審査に主査又は副査として御尽力され、博士後期課程学生の育成に努められました。

平成12年度から2年間、環境科学研究所長に就任し、研究所の運営に御尽力されました。特に、平成14年2月に外部評価委員会を開催され、研究所創立以来最初の外部評価が実施されました。また、「環境研究交流しずおか集会」など研究所の社会貢献活動の礎となる組織作りをされるとともに、率先して本学及び環境科学研究所の公開講座等の講師、さらには専門分野の学識を応用して、環境庁(省)、静岡県、静岡市の各種委員を歴任し、地域貢献に努められました。

さらに、平成15年度から2年間、生活健康科学研究科長に就任され、その間、連携大学院制度の円滑な運営、生活健康科学研究科における大学院任期制の確立、インターンシップの単位化、大学院入試制度の改革等々に御尽力されました。また、平成16年7月に開催された日本環境化学会の討論会では、大会委員長を務められ、静岡県で初めて開催された環境化学討論会を成功に導かれました。

教員の人事

採用

(7月1日付け)

大門 貴志 薬学部講師

林 秀樹 薬学部講師

比留間洋一 国際関係学研究科助手

(8月1日付け)

岩村 武 環境科学研究所助手

(9月1日付け)

清水 広介 薬学部助手

稲垣 真輔 薬学部助手

望月 和樹 食品栄養科学部助手

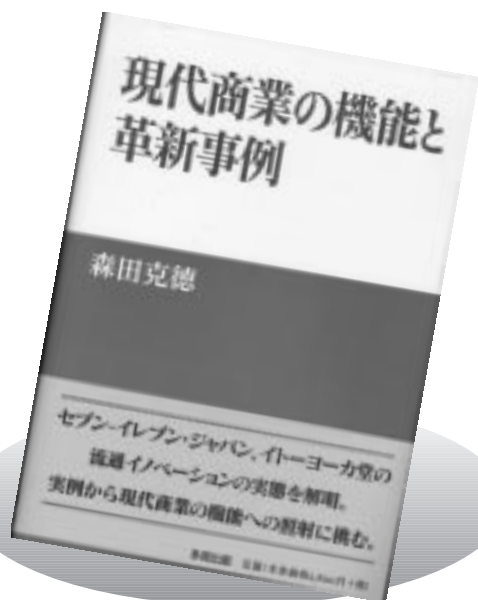
退職

(8月31日付)

小田巻真理 食品栄養科学部助手

本学教員の著書紹介

経営情報学部 助教授 森田 克徳



『現代商業の機能と革新事例』多賀出版，2004年5月。

本書は，現代商業における機能から実際の商業活動への照射を試み，わが国の代表的な商業企業の革新的な事例を時系列的に跡付けることによって，卸売商業，小売商業の企業間関係にいかなる変化が生じ，新たな連結機能が創出されて流通イノベーションがいかに進展したのか検討することを中心的課題とした。

第 部「現代の商業」では，「商業の概念」，「商業にかんする学説および研究アプローチ」，「現代商業の機能」，ついで「卸売商業」の概念，形態，機能，業務について，そして理論

として，「総取引数極小の原理（ホールの第一原理）」，「不確実性プールの原理 [集中貯蔵の原理]（ホールの第二原理）」を検討した。「小売商業」では，概念，形態，機能を概説し，理論としては，「小売の輪」，「業態ライフサイクル論」，「延期 投機の原理」および「延期 投機の原理のコンビニエンスストア・システムにおける基本原理化」を示して論じた。

第 部「現代商業の革新事例」では，セブン イレブン・ジャパンおよびイトーヨーカ堂の流通イノベーションの起点となった「単品管理」，ついで，「チーム・ロジスティクス」，「チーム・マーチャンダイジング」，「チーム・インフォメーション」，そしてグローバル化といった視点でサウスランド社の再建を支援した過程と近年の新たな潮流と目される電子商取引の事例として，セブンドリーム・ドットコム，IYバンク銀行を取り上げた。さらに「終章」において，「ロジスティック・マーチャンダイジング・システム」にかんして論じた。

本書で丹念に跡付けることに意をそそいだセブン イレブン・ジャパンおよびイトーヨーカ堂の事例では，「外部環境」の変化にたいし，実際の業務の1つひとつについてその根源的な意味を問い直し，原理原則を再構築して堅守しようとした鈴木敏文の確固たる意思が強く刻まれている。鈴木は，既存の知識体系や固定的な思考にとらわれることなく，豊かな発想を基盤に広い視野と創造的思考をもち，合理的実証性に基づいて，顧客の視点に立って流通イノベーションを推進した。その流通イノベーションの実践のプロセスを丹念に跡付け吟味するためには，商業活動を構成する要素にいったん還元して，検討する必要がある。そして，「商業とはなにか，いかなる機能を有し，どのような役割を，本来，果たすべきものなのか」といった問題意識が，本書の底部では貫かれている。

薬学部・薬学研究科の動き

薬学部長 三輪 匡男
薬学研究科長 奥 直人

学校教育法、薬剤師法が改正され、平成18年度より臨床に係わる実践的な能力を培うことを主たる目的とする薬剤師養成の修業年限が6年とされました。また、国公立大学の薬学部が製薬企業の研究技術者など多様な人材の養成に係わってきた実績も評価され、4年制学科も併せて設置が可能となり、静岡県立大学にあっても大学院教育（博士前期、後期課程）と連携し、主として研究・技術者などの養成にあたる薬科学科を設置できることになりました。平成18年4月より本学薬学部を6年制薬学科定員80名、4年制薬科学科定員40名の2学科に編成変えする、薬学教育修業年限変更の届出に係わる事前相談書類を文部科学省に提出しました。届出指定書式以外の追加資料の提出が求められるなど、受け取り側で多少の混乱がありましたが、6月下旬に文部科学省から準備書類に準じた届出書の提出が可能との連絡を受け、本学薬学部が平成18年度より6年制と4年制の2学科体制の教育を実施出来ることになりました。

1) 本学部の薬学科教育の特色：

- i： 薬学科全学生が静岡県立総合病院で病院実務実習を実施する。
- ii： 事前実務実習1ヶ月と実務実習として病院実習4ヶ月、薬局実習1.5ヶ月とした。

6年制薬学教育の主要な変革点は医療施設における実務実習であります。本学のように附属病院を併置していない場合は、いわゆる故郷実習と称した学生の出身地の医療施設で実務実習を実施す

る案が私立大学を中心に考えられていました。しかしながら、全国から集まっている本学薬学部学生に故郷実習などを導入した場合には、臨床教育の重要な部分を占める実務実習を主体性を持って指導出来ないこと、また医療施設間の格差を無視出来ず、教育上重大な支障となることなど設置者の理解を得て、県立総合病院内に実務家教員8名、非常勤実務家教員2名からなる薬学教育・研究センターを設置し、薬学科全学生及び大学院修了生の実務実習を実施することとしました。

薬剤師会、病院薬剤師会などの実務実習関係者の申合わせとして病院2.5ヶ月、薬局2.5ヶ月を標準とする連絡がありましたが、本学の6年制薬学教育は高度医療に対応できる臨床薬剤師養成を目指したものであり、前者を4ヶ月、後者を1.5ヶ月とした実習カリキュラムとしました。

2) 薬学部組織の改組（大講座・分野制）：

旧薬科大学時代から薬学部は教員組織を講座単位としてきましたが、6年制薬学教育に対応するために、講座再編を余儀なくされ、旧18講座から1講座を削り、臨床薬物動態解析学分野と医薬品情報解析学分野を新設するとともに大講座・分野制（別表）としました。平成18年度からの組織変更ではありますが、臨床実務家教員が全国的に不足しており、後年度になるほど適格者の採用が困難になる状況であることを考慮し、教授、講師を平成17年度に先取りする形で採用し、新カリキュラムに対応する人事を進めました。

(別表)

		講座名	分野名
薬学部	薬学	医療薬学大講座	生体情報分子解析学分野
			分子病態解析学分野
			薬物動態学分野
			創剤科学分野
			医薬品情報解析学分野
	薬学教育・研究センター 県立総合病院	臨床薬剤学 (臨床薬物動態解析学分野)	臨床薬理学 (臨床薬物作用解析学分野)
			病態機能解析学分野
		薬学教育・研究センター 谷田	身体運動科学分野
			薬理作用解析学分野
		機能生命科学大講座	衛生・分子毒性学分野
	生体分子薬学分野		
	医薬生命化学分野		
	医薬品合成化学分野		
	分子薬学大講座	生体機能分子分析学分野	
		生薬・天然物化学分野	
		医薬品化学分野	
	薬科学	分子設計創薬科学大講座	医薬品創製科学分野
			生命物理化学分野
		医薬品探索解析学講座	薬品資源学分野
生命薬科学大講座		生体機能解析学分野	
	免疫微生物学分野		
附属施設	漢方薬研究施設		
	薬草園		
	総合研究センター		
大学院 薬学研究科	附属施設	創薬探索センター	

3) 平成18年度以降に必要となる事業計画:

新薬学部体制の基本設計は出来上がりましたが、まだ県立総合病院循環器病センター内への薬学生病院実務実習のための施設整備、県内薬局における実務実習に要する経費(教員旅費、実務実習経費など)、実務事前実習に必要となるモデル薬局実習室、講義室の増設(高規格、高機能講義室)、CBT、OSCEに対応する演習・実習室の設置などまだ検討課題が残っています。

4) 平成16年度薬剤師国家試験の成績:

今春実施された薬剤師国家試験の結果は新卒者の合格率が97.6%(123名中120名合格)と国公立大でトップでありました。この成績は日頃の教員の緻密な教育面の成果と喜んでいきます。

5) 平成17年度高校生対象の薬学体験学習プログラム、ファーマカレッジ2005の実施:

平成11年度から薬学部で実施している高校生を対象とした薬学研究への参加型学習プログラムが今年度は第7回を迎え、県内高校生の応募者から選抜された36名が参加し、8月3日、4日にわたって6講座の教員・大学院生の指導のもとに実施されました。



ファーマカレッジ2005

6) 海外大学との学部間協定書締結:

タイ国マヒドン大学薬学部、熱帯医学部との学部間協定の締結のために、三輪学部長、奥研究科長、鈴木康夫元学部長、野口評議員の4名がバンコクに出張し、8月8日両学部間との協定書の交換式を無事執り行いました。マヒドン大学とともにタイ国の主要な高等教育・研究・医療機関である国立ガン研究所、チュラボンリサーチ研究所の他、チュラロンコン大学や既に学部間協定が結ばれているコーンケン大学等に立ち寄り、各施設長と懇談し、静岡県立大学との今後の教育・研究交換協定締結に向け良好な会談を持つことが出来ました。



マヒドン大学熱帯医学部との学部間協定調印式

食品栄養科学部の動き

食品栄養科学部長 木苗 直秀

本学の開学と同時に開設された食品栄養科学部は19年目を迎え、「21世紀の食と健康を科学する」を合い言葉に教育面、研究面で益々充実している。

既に1,100名におよぶ学部卒業生・大学院（食品栄養科学専攻）修了生を世に送り出している。食品学科卒業生は主に食品関連企業で企画、研究開発、製造、品質管理等の各部門で、また、栄養学科卒業生は主に学校・病院等で管理栄養士として活躍している。近年、教職や公務員を目指す大学院生が増えている。

1. 教育面について

〔食品学科〕

平成14年度より、3年次への編入学生の募集を行っている。本年度は13名の志願者があり、高専出身者・社会人等3名が合格した。カリキュラムの全般的な見直しにも着手しており、講義や実習、卒業研究をさらに充実させることをめざしている。特にJABEE（日本技術者教育認定基準）を通して国際的に通用するカリキュラムの編成や理科教員免許コースの開設について検討している。

〔栄養学科〕

管理栄養士養成施設として既に5年目を迎え

ている。本年3月の管理栄養士国家試験の合格率は100%であった。より専門的な知識と技術を修得するためのカリキュラムの見直しを行っており、また、食育を推進するため栄養教諭免許コースの開設を検討している。

〔共通〕

本学部は両学科とも定員25名と少人数であるのでチューター制度の活用・充実を考えている。学生に対しては、勉学のみならず、色々な悩み事を含めた個人相談に対応できるように1学年に6～7名の教員が配置されている。講義・実習実験の充実をはかるため、学生による授業評価が教員有志によりスタートした。学生にとって、より満足度の高い講義になることを期待している。

2. 研究面について

研究面では学長特別研究費や学部長特別研究費等による学部・専攻科内共同研究が盛んである。さらに、文部科学省の科学研究費や、21世紀COEプログラム、都市エリア事業等により、他学部や他大学との共同研究が積極的に行われている。一貫教育による若手研究者の育成をめざしている。

3. 体制の整備

平成19年4月の法人化を視野に入れ、学部および学科の体制、教育、研究面での再点検を行い、新生食品栄養科学部の構築を目指している。

4. その他

〔インターンシップの単位化〕

学部では平成14年度より10～20名の3年生が県内の企業や公的試験研究機関でインターンシップを行っている。学生が実社会を体験し、自身の将来の進路決定に役立っており、平成16年度より単位化（1単位）されている。

オープンキャンパス（2005.8.2）



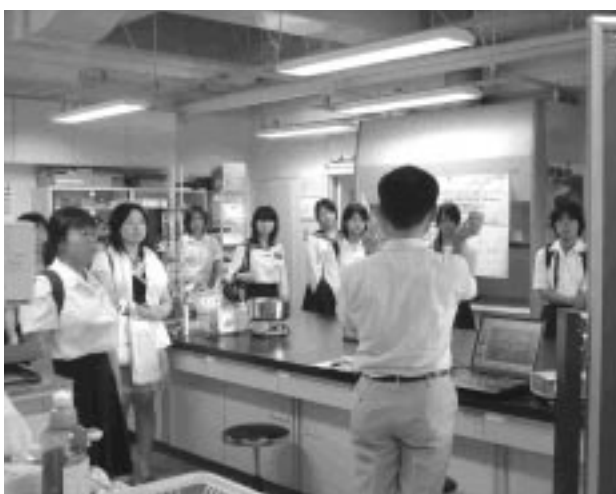
〔高校への出前講義〕

県内高校への出前講義は平成16年度は12校、17年度は6校を予定しており、高大連携を推進している。8月2日に実施したオープンキャンパスには県外からの130名を含めおよそ450名の高校生が訪れた。このことは当学部がめざす「21世紀における食と健康を科学すること」への関心が極めて高く、将来の実務者、研究者の育成にも弾みがつくものと思う。

1年生学外研修旅行（2005.7.11）
（御前崎 お茶の郷 明治製菓 サッポロビール）



3年生学外研修旅行（2005.4.27-28）
（国立遺伝研究所 介護老人福祉施設・特別養護老人ホーム
明治乳業研究部 アサヒビール神奈川工場）



生活健康科学研究科の動き

生活健康科学研究科長 木苗 直秀

生活健康科学研究科は、食・環境・健康を共通認識として、食に関する諸問題を科学することにより、健康の維持・増進をめざし、また、地球環境・生活環境に関する諸問題を分析し、評価し、対策を立て生態系とヒトとの調和を計ることをめざして2つの専攻で船出して既に15年目を迎えている。

食品栄養科学部を母体とする食品栄養科学専攻では文部科学省より平成14年度に採択された21世紀COEプログラム「先導的健康長寿学術研究推進拠点」の中核専攻として食薬融合における新領域の確立のための教育・研究を推進している。平成16年度より大学院前期入学試験に自己推薦制度を導入した。平成17年度は32名が合格した。

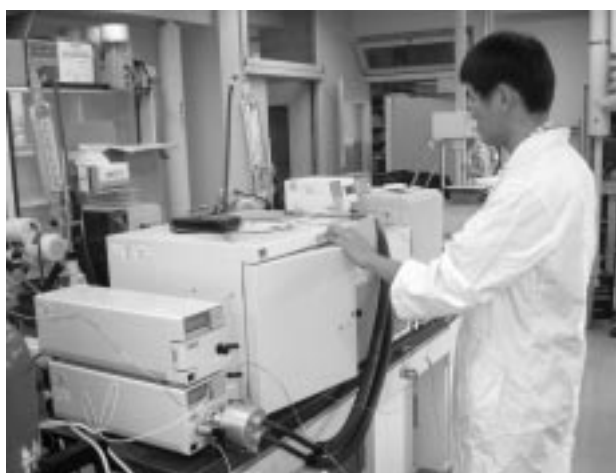
また、環境科学研究所を母体とする環境物質科学専攻では本年3月に定年退官された後任として3名の主任教員が赴任し、地球環境の専門家とし

て活動を開始した。

両専攻の独自性を尊重しつつ、21世紀COEプログラムや都市エリア産学連携事業（いずれも平成14年度に文部科学省から採択された）を通して共同研究が盛んである。本年度連携大学院制度を利用して静岡環境衛生科学研究所、静岡工業技術センター、聖隷浜松病院で学生が学んでいる。また、本学薬学研究科や静岡大学農学・理学研究科との単位互換制度も活用されている。

平成13年度に発足したインターンシップ制度については本年度25名が企業や県試験研究機関で研修を受けた。

本学の法人化を視野に入れ、本研究科の教育・研究・社会貢献等について再点検を実施しており、「食の科学」、「環境の科学」の一層の発展と両専攻の連携体制をより強固にするため、将来構想検討委員会が頻度高く開催されている。



天然物の超臨界流体抽出
(食品衛生学研究室)



活性汚泥処理装置の運転
(環境工学研究室)

研究者紹介

都市エリア産学官連携促進事業（発展型）

「心身ストレスに起因する生活習慣病克服をめざしたフーズサイエンスビジネスの創出」

本学関係者（印：研究グループ代表）

- (1) 研究統括：木苗直秀（食）
- (2) 研究テーマ1：ヒトの生体分析・評価・高機能化技術の開発とビジネスへのアプローチ
中山 勉（食） 熊谷裕通（食） 熊澤茂則（食） 小林公子（食） 豊岡利正（薬） 下位香代子（環）
大橋典男（環）
- (3) 研究テーマ2：光技術を用いた非侵襲病態解析とビジネスへのアプローチ
奥 直人（薬） 山田静雄（薬） 小野孝彦（薬） 高木邦明（薬） 浅井知浩（薬）
- (4) 研究テーマ3：酵素工学的手法を用いた高機能化素材創生技術の開発とビジネスへのアプローチ
酒井 坦（食） 小林裕和（食） 伊藤創平（食） 丹羽康夫（食） 鈴木康夫（薬） 野口博司（薬）
鈴木 隆（薬） 阿部郁朗（薬） 森安裕二（食）
- (5) 研究テーマ4：抗ストレス食品・化成品素材の開発及び発現機能の解析とその応用製品への展開
木苗直秀（食） 増田修一（食） 横越英彦（食） 辻 邦郎（薬） 石田均司（薬） 三輪匡男（薬）
菅谷純子（薬） 吉成浩一（薬） 五十里 彰（薬） 鈴木裕一（食） 林 久由（食）

研究助成等採択

独立行政法人科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業 個人型研究さきがけタイプ（PRESTO）

研究者（兼任）：薬学部 生薬学教室 講師 阿部 郁朗

研究領域：代謝と機能制御

研究課題：二次代謝酵素の機能開拓と新規生物活性物質の創製

平成17年度 財団法人社会安全研究財団一般研究助成

研究代表者：看護学部 教授 鈴木 啓子

共同研究者：看護学部 講師 石村佳代子

研究課題：保健医療の場における暴力の問題と安全対策に関する研究

受賞



菅 敏幸 教授

平成16年度日本薬学会 薬学研究ビジョン部会賞を受賞

薬学部の菅敏幸教授が平成16年度日本薬学会薬学研究ビジョン部会賞を受賞しました。受賞対象の研究は「有機合成を基盤とするセクレターゼの機能解析研究」で、平成17年7月21日に開催された第6回創薬ビジョンシンポジウムにて授賞式が行われました。



山口正義 教授

「Lifetime Achievement Award」を受賞

大学院生活健康科学研究科 食品栄養科学専攻 代謝調節学研究室の山口正義教授は、国際的に権威ある英国ケンブリッジのInternational Biographical Centre（国際人名協会）を基盤にして30年前に創立された芸術・科学・文化活動を展開している国際機関のThe World Congress of Art, Sciences and Communications (Cambridge, England)から、「The World Congress of Art, Sciences and Communications Lifetime Achievement Award」を授与されました（2005年5月6日）。

また、米国における政府機関、各種文化団体及びAmerican Biographical Institute（米国人名協会）が支援し、UNESCOとも連携しているThe United Cultural Convention (Raleigh, USA)から「2005 Lifetime Achievement Award」を授与されました（2005年5月27日）。

これらの賞は、優れた業績を生涯にわたって積みあげてきた功績に対して与えられる高貴な賞であり、各機関における評価選考委員会が各種国際人名録に掲載されている人を主な対象にして調査、選考したものです。なお、受賞者はそれぞれの機関本部に永年にわたり顕彰される名誉が与えられ、関係機関からプレス公表されました。

この度の受賞は、Who'sWhoなどの国際的な各種人名録に掲載された業績（生命科学及び健康科学の分野における30年余りの学術活動を通しての430報を超える英文原著科学論文の国際誌掲載、複数の新規蛋白質・遺伝子の発見とその展開並びに多数の国際特許登録にもとづく社会貢献など）が注目され、評価されたものです。



坂田昌弘 教授

第14回環境化学技術賞を受賞

環境科学研究所の坂田昌弘教授は、平成17年6月16日に、大阪国際交流センター（大阪市）で開催された第14回環境化学討論会（日本環境化学会主催）において、第14回環境化学技術賞を受賞しました。受賞の対象となった研究は、「イオン電極を用いた排水中ホウ素の簡易・迅速測定法」です。本研究は、同教授が本年3月まで在籍した（財）電力中央研究所で実施されたものであり、同教授を含む4名の共同受賞です。平成13年7月にホウ素の排水基準が設定されたことにより、石炭火力発電所等の排水中のホウ素が規制対象となりました。本研究では、市販のイオン選択性電極（テトラフルオロホウ酸イオン（ BF_4^- ）電極）を用いる電位差分析法に着目し、ホウ酸（ H_3BO_3 ）から BF_4^- への転換反応を速度論的に解析することにより、ホウ素濃度を迅速に計測する手法を開発しました。現在、電中研とメーカーとの共同研究により、本測定法を基にした実用化研究（自動測定装置の開発）が行われています。

奨学金をありがとうございます

「日本平留学生基金」入学祝金贈呈式

日本平留学生基金（代表イトウ秀雄氏）贈呈式が5月24日に本学で行われ、今年入学した学部留学生8名全員（薬学部1名、国際関係学部7名）に1人ずつ入学祝金1万円が贈呈された。

日本平留学生基金は、県立大学に在学している、主として東南アジアからの留学生に金銭的援助を行うことを目的として、平成8年にイトウ秀雄氏の遺暦記念に設立された基金であり、今年で10年目を迎える。イトウ氏の基金募集の趣旨に賛同した協力者は500を超える個人・団体にのぼる。

贈呈式でイトウ代表は「異国での生活はたいへんでしょうが、多くのことを学び、地域や国のために役立てて欲しい」と挨拶し、留学生を代表し

て国際関係学部1年マワッターゲ・チンタカ・マナワラタナさんが「(イトウ氏の)温かいお気持ちを忘れずに充実した学生生活を送っていきます。」と感謝の言葉を述べた。



「富士川町静岡県立大学留学生就学奨励金」交付式

富士川町文化事業振興会が支給する就学奨励金の交付式が6月11日、富士川町中央公民館で行われ、学部1年の留学生8名全員に1人あたり8万円が支給された。

この就学奨励金は、本学に在学する優秀な留学生に就学奨励金を交付し、留学生の教育・研究活動を支援するとともに、富士川町が主催する事業を通じて、留学生と富士川町民との相互の心の触れ合いを深め国際交流を図ることを目的としている。

交付式では坪内伸浩富士川町長が挨拶し、留学生を代表して薬学部1年ディン・ティ・ホン・ニ

ユンさんが「皆様の御厚意を無駄にすることのないよう、今後もよりいっそう勉学に励んでいきたいと思えます。」とお礼の言葉を述べた。



地元企業からの奨学金

奨学生を募集する企業がそれぞれ論文テーマを定め、応募論文が優秀であると認められた生徒に贈られる奨学金です。

「万城食品奨学金」授与式

万城食品奨学金授与式が6月3日に三島市の万城食品本社にて行われた。

本奨学金は、万城食品により中国出身の留学生への奨学金支給を目的として設立され、今年度で9回目を迎えた。本年度は、昨年度に引き続き国際関係学部2年趙亭さんが選ばれた。

授与式では、万城食品の米山寛代表取締役から目録が贈られ、趙亭さんがお礼を述べた。



「TOKAI奨学金」奨学生認定書授与式

TOKAI奨学金奨学生認定書授与式が6月22日に本学で行われた。

本奨学金は、TOKAIにより地域に密着した企業の事業の一環として設立され、今年度で14回目を迎えた。

「ネット販売の将来と問題点について」を論文テーマに募集し、国際関係学部3年鈴原菜美さん、国際関係学部4年安麗花さん、薬学研究科博士前期課程1年野崎瑠衣さんが選ばれた。

授与式では、TOKAIの真室孝教常務から認定書が贈られ、「子どもの教育に携わる夢を実現するために、奨学金を役立てたいと思います。」

(鈴原さん)など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べた。



「静清信用金庫奨学生」奨学金授与式

静清信用金庫奨学金授与式が6月27日に静岡市葵区の静清信用金庫本部で行われた。

本奨学金は、地域に生きる静清信用金庫の基本方針に従い、次代を担う人材育成を目的に設立され、今年度で9回目を迎えた。

「ニート問題と解決策について」を論文テーマに募集し、国際関係学部3年大滝育美さんが選ばれた。

授与式では、静清信用金庫の板倉征夫理事長から認定書が贈られ、大滝さんが「語学力向上のために、奨学金を有効に使わせていただきます。」とお礼の言葉を述べた。



「静岡ガス奨学生」認定証授与式

静岡ガス 奨学生認定証授与式が6月28日に静岡市駿河区の静岡ガス 本社で行われた。

本奨学金は、静岡ガス により、社会有用の人材育成に寄与することによって地域社会への貢献を図ることを目的に創設され、今年度で6回目を迎えた。

「自分自身の将来像について」または「環境問題について」を論文テーマに募集し、国際関係学部3年高橋永次さん、経営情報学部3年丁婕さんが選ばれた。

授与式では、静岡ガス 大石司朗取締役社長から認定証が贈られ、「論文を読んで頑張っている若者がいることが分かり、うれしくなった。」と激励を受けた。



「清和海運奨学金」授与式

清和海運 奨学金授与式が7月6日に本学で行われた。

本奨学金は、清和海運 により、地域に密着した企業として経済的に就学困難な学生の援助をすることを目的に設立され、今年度で3回目を迎えた。

「静岡県における静脈物流と今後の可能性」を論文テーマに募集し、薬学部3年鈴木あさひさん、国際関係学部4年安慶名京子さん、生活健康科学研究科博士前期課程1年富山健一さんが選ばれた。

授与式では、清和海運 の宮崎總一郎代表取締役社長から認定書が贈られ、「奨学生に選んで頂い

たことで、卒業論文に集中できます。質の高い論文を完成させたいと思います。」(安慶名さん)など、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べた。



「天野回漕店奨学生」認定書授与式

天野回漕店奨学生認定書授与式が7月14日に本学で行われた。

本奨学金は、天野回漕店により「共存共栄」の経営理念に沿って地域社会の発展に努め、地元静岡県の学生の奨学奨励に寄与することを目的に設立され、今年度で11回目を迎えた。

「自国と日本文化の違いについて。又、あなたの対処法は？」等を論文テーマに募集し、国際関係学部3年奚雅璇さん、同2年王燕さん、同2年張剣涛さんが選ばれた。

授与式では、天野回漕店の小松信介取締役社長から認定書が贈られ、奨学生がそれぞれお礼の言葉を述べた。



「駿河精機奨学金」授与式

駿河精機 奨学金授与式が8月11日に本学で行われた。

本奨学金は、駿河精機 により、経営理念の《天意創造》のもとに地域に密着した企業を目指し人材開発の一環として設立され、今年度で10回目を迎えた。

「人生で感動したこと」を論文テーマに募集し、食品栄養科学部1年山根由李恵さん、国際関係学部3年夏妍さんが選ばれた。

授与式では、駿河精機 の望月信行取締役から奨学金が贈られ、奨学生が「日本と中国の架け橋となれるよう、勉学に精進します。」(夏さん)など、それぞれお礼の言葉を述べた。



人生で感動したこと

～駿河精機奨学生応募論文より～



国際関係学部 国際言語文化学科
3年 夏 妍

～病気になりたがる女の子～

もし、私が貴方に「病気になりたがる人がいる。」と言ったら、

貴方は信じられるだろうか？

ある一人の女の子は父親と暮らしていた。彼女の両親は彼女が八歳のときに離婚した。裁判の結果、彼女はお父さんと一緒に生活することになった。二年後、彼女のお父さんは再婚した。相手が女の子の家に男の子を連れて来て、四人の新しい生活が始まった。新しいお母さんは「シンデレラ」のお話に出てくるような悪い継母ではなく、女の子を虐めることは一度もなかった。しかしながら女の子に対する態度が冷淡（徹底的な冷淡）であった。

一方、継母は自分が連れてきた男の子には愛情をいっぱい注いでいた。しかも、女の子のお父さんも男の子のことを可愛がり、女の子には目を掛けなくなっていった。女の子は「私のことをちゃんと見てくれば叱られても、打たれてもいいから」と思った。あまりの変化で、女の子は自分の世界に引きこもり、性格が暗くなった。女の子は無視された寂しい環境の中で足掻いていた。この寂しさはまるで重い雲に負われているようで、いくら逃げようとしても逃げられないのだ。

ある時、女の子は突然病気になった。そのとき、お父さんは会社の休みを取り、ずっと女の子の側にいてあげた。継母も、冷淡な態度から一変し女の子が好きな料理を作ってあげた。悪戯な幼い弟さえも大人しくなった。病気になったことで久しぶりに家族の愛が女の子の身に暫く戻った。女の子は病気に掛かっていた間に、家庭の中心となり、家族からの

愛を存分に味わった。この事以来、女の子はある事に気づき始めた。愛されるためには自ら病気になる機会を増やすことだと。女の子は命に関わらない病気であればどんな病気でもなりたいたいのだ。これは、女の子にとって唯一の望みだった。この孤独な女の子はその自虐の方法を通して、父親と家族の愛を求めた。しばらくして、誰にも想像できないような悲劇が女の子を襲った。ある日、女の子は自分の左足を骨折させ、ベッドに三ヶ月くらい就くことで、たっぷり父親の愛を味わいたいと思った。しかし、結局左足を永遠に失うことになって、後の人生は車椅子と友になることになった……。

今朝、古い本を整理したところ本の中から一枚の写真が落ちた。色褪せた写真の中で笑っている女の子がいた。彼女こそ、この話の主人公琳ちゃんだ。琳ちゃん一家は8年前に、私が住んでいるアパートに引越して来た。最初に彼女と会ったときはなんて暗い女の子なんだろうと思った。数年ぶりの現在、琳ちゃんは、まだ静かに車椅子の上で、微笑んでいるのだろうか？彼女は愛されるために左足を失ってしまったが、いまでもそれなりに価値のあることだと思っているのだろうか？

彼女の行為は過激だと思う人は私の周りに少ないが、私は彼女の愛に対する純粋な想いに感動し、愛の反対が憎しみではなく「冷淡」と「無視、無感覚」であると思った。ふと気づくと古く小さな写真の上に涙がこぼれていった。涙 そういえば、ここ数年私は涙が溢れてくるような感動する心を忘れてしまっている。それは私も無関心な人間になってしまったのか、それとも心が自分も知らない大きな力に押しつぶされそうになっているのか。急速な発展の現代社会では感動が少なくなると感じている人は

いると思う。なぜ人は出会い、又離れていくのか、それはお互いに縁がないのではなく、我々の生活の中に感動という二文字のものが少なくなったからである。ちょっと不安な心を静め考えることができたなら、現代人に欠けている感動はいつでも、どこにでもあるということに気づくはずだ。感動こそ、他人に対する思いやりの始まりに違いない。琳ちゃんの親たちは彼女の想いに気づき、感動することができたなら、このような悲劇は起こらなかつたらうと私は思った。

気持ちを整理して、長い間ご無沙汰している私に沢山感動をくれた人たちに電話をしようと思話をもち上げた……。



**食品栄養科学部 栄養学科
1年 山根由李恵**

私が人生で一番感動した時は、五歳からかけ続けていた眼鏡がはずれた時だ。私は、生まれつき左目の視力がほとんどなかった。医師による診断は、不同視弱視。最初に行ったA病院では、もうこの目は治らないと言われた。だが、あきらめきれずに行ったB病院で、目が見えるようになるという希望を与えられた。それから六年間、私は眼鏡をかけ続けた。その六年間で、私は様々な事を知った。眼鏡をかけてまず最初に感じたのは、見なれない物に対する、人々の過剰な反応だ。当時はまだ今のように、眼鏡をかけている子供はほとんどいなく、私の通っていた幼稚園でも、眼鏡をかけていたのは私一人だけだった。そのため、一つ年上の子供達にからかわれたり、いじめられたりした。それよりも嫌だったのは、道を歩いていると注がれる、大人達の視線だった。なぜこんな小さな子供が眼鏡をかけているのかと問われる度に、何か自分がいけない事をしていくような気分になった。そんな人々の視線から眼鏡を隠すように、下ばかり向くようになってしまった私を見て、母はずっと自分を責めていた。医師には、

遺伝ではないと言われたが、私の目がこんなふうになってしまったのは自分のせいではないかと、ずっと思い悩んでいたという。そんな、母にとっても私にとっても辛かった六年間の思いが、眼鏡をはずしてもいいと医師に言われた瞬間に、すべて昇華されたのである。眼鏡から解放されたあの日、私達の世界は喜びで輝いて見えた。あんなに嫌だった六年間も、今では私を形成するものとして、欠けてはならない経験だったと思うことができる。もしあの六年間がなかったら、自身が望んだ訳でもないのに、重荷を背負ってしまった人々の苦しみや悲しみを知ることなく、大人になってしまったかもしれないからだ。あの経験のおかげで、私はそういう人々の気持ちを、少しは考えることができるようになったのではないかと思う。

今、私は管理栄養士になって、病院の栄養サポートチームで働く事を目指している。私がこの職業を目指している理由の一つとして、私の目が治るといいう希望を与えてくれた、B病院の医師の存在がある。あの時私はまだ幼くて、自分の身に起こっていることはよくわからなかったが、A病院に行った時、側にいた母の固い、悲しげな表情から、漠然とした不安は感じていた。その不安が、B病院の医師の温かい笑顔と言葉によって、ずっと消えていった感覚だけは、今でもよく覚えている。そしてこの笑顔と言葉は、私だけではなく母の心までも、やさしく包んでくれたのである。私は、このB病院の医師のように、不安や悲しみを抱えている人の心を軽くしてあげられるような人になりたいと思った。そして、将来の自分の職業について考えた時に、もともと食物への関心が高かったため、そうなれた自分を生かせる職業として、管理栄養士を選んだのである。何年か後の私が、患者さんやその家族に、この人が担当なら安心だと思ってもらえるような管理栄養士であるために、今、一日一日大切に生きていきたい。

クラブ・サークル紹介

■ 防災ボランティアサークル「防‘Z」の活動から

「AEDの使用技術講習を受けて」 看護学部2年 鈴木 智勝

私達、防災ボランティアサークル「防‘Z」では、毎年消防署職員による救命講習を受講していますが、本年度からは新たにAEDの使用技術が加わりました。AED（Automated External Defibrillator）とは、日本語では「自動体外式除細動器」といいます。簡単に言えば、突然心停止状態に陥った時、心臓に電気ショックを与えて、正常な状態に戻す医療機器を一般市民でも安全に使用できるように改良したものです。一番の特徴として、音声ガイドに従っていきただけで安全に使用できるようになっています。決して難しいものではなく、1回でも使い方を習えば、誰でも簡単に使用できるものです。

昨年度、厚生労働省が一般市民によるAEDの使用を認めたことから、スポーツ施設や学校等の大規模施設を中心に設置が徐々に進められています。既に救命事例も報告されていることから、今後も設置施設の増加、使用技術の普及が望まれています。残念なことに、本学には、まだ導入されていませんが、静岡県内の中学校では、先生の突然死を救えなかった教訓からAEDを導入した学校もあるとの新聞記事も出ていました。高価な機器ですが、ぜひ本学でも導入を検討していただきたいと願っています。



「普通救命講習」

「静岡県地震防災センターを見学して」 看護学部2年 望月 美里

静岡県は150年前以来、大地震が起きていません。大地震は100年から150年周期で発生するため、現時点では東海大地震は明日おきても不思議はないといわれています。

今回、静岡県地震防災センターに行き、震度6の揺れを体験したり、ツナミドームシアターで津波についての対処法やその被害について学習したりしました。また、家具が固定された部屋と固定されていない部屋での被害の違いを見て、家具の固定の重要性を感じました。このように、地震について学び、地震に対する恐怖が芽生えたと同時に、私たちに何ができるのかを考えさせられました。



県防災センター見学

想像を絶する事態が起きた時、大学生である私たちが地域の方々と協力し、消火活動や負傷者の救出を行うことが求められていると思います。防災ボランティアサークルとして、地震が発生した際に、活動が行えるような体制を組み、地域の方々との交流を通して、活動の輪を広げていきたいと思いました。

想像を絶する事態が起きた時、大学生である私たちが地域の方々と協力し、消火活動や負傷者の救出を行うことが求められていると思います。防災ボランティアサークルとして、地震が発生した際に、活動が行えるような体制を組み、地域の方々との交流を通して、活動の輪を広げていきたいと思いました。

ホームページアドレス <http://nursing.u-shizuoka-ken.ac.jp/bouz/index.html>

■ ■ 準硬式野球部が県内リーグを制覇！

準硬式野球部主将 正田 直巳

平成16年度秋季リーグに引き続き平成17年度春季リーグにおいて、我が県立大準硬式野球部は静岡県内リーグ（4勝1敗）で優勝し、連覇を達成しました。

大会前は、前大会で優勝したときのメンバー5人が引退したため相当厳しい大会になると予想していました。しかし、試合経験の少なさを練習中一球一球に集中することや、全体練習後の自主練などで補い、見事克服することができました。また大会中、序盤で敗北するなど苦しい立ち上がりだったのですが、その後ピッチャーを中心とした守りの野球で、相手につけている隙を与えずに試合を有利に進め、全員野球で優勝を勝ち取りました。

新1年生8名が入部し、野球部はますます活気づいています。レギュラー争いもさらに熾烈になりチームの底上げにもなりました。先輩が未だ達成したことのない三連覇を目指し、厳しい残暑の中で練習に励んでいます。今後とも皆さんの応援をよろしくお願いします。



■ ■ 男子サッカー部



男子サッカー部は、火・水・金曜日の4時半からと土曜日の1時から練習しています。出場する公式戦には、4～6月に静岡県内の大学で競う「県内リーグ」、5～6月に天皇杯の静岡県予選である「スルガカップ」、9～10月に東海の強豪が集まる東海リーグに上がるための「チャレンジリーグ」、11月に4年生が引退した後のチームで東海の大学と競う「新人戦」があります。その他にも練習試合、遠征や合宿など、何かと盛りだくさんの部活です。

■ ■ ジャズダンス部

ジャズダンス部では、毎年8月に行われる清水港祭りの「清水港かっぱれ」に参加しています。夕方から夜にかけて清水の大通りを連をなして踊る祭りです。ジャズダンス部では、毎年、おそろいのTシャツを着て、OGを含め参加しています。

今年は約50人が参加し、2時間半、汗をかきながら踊り続けました。地元の清水の方とも交流でき、良い機会となっています。



「はばたき94号」16ページ掲載内容の訂正

<訂正記事>

「科学研究費補助金採択状況」 / 「平成17年度に新規採択された研究課題及び研究者」

(正誤箇所)

基盤研究(C)

(誤) : 渡辺和雄 (正) : 渡部和雄

図書館だより

シリーズ 『私の1冊の本』

図書館では、利用者への読書推進の一環として、先生方が読んで、感動し心に残った本を紹介していきます。

また、学生の皆さんに、在学中に是非読んでいただきたい教養図書として、先生方が推薦された本を自由閲覧室に配架して「100冊の本」コーナーを設けます。(100冊の本のリストは図書館ホームページに掲載して紹介する予定です。)

野口 博司 薬学部教授

紹介図書名 生命操作は人を幸せにするのか
 蝕まれる人間の未来

著者名 レオン・R・カス

出版社名 日本教文社

ISBN 4-521-08145-5

図書館所蔵 2階閲覧室 490.15/Ka 78

ブッシュは「受精卵を破壊する研究に税金を使ってはならない」として、難病治療に役立つといわれる胚(はい)性幹細胞(ES細胞)の研究規制を強化しようとする「派」の主であり、著者はその設置した大統領生命倫理委員会委員長である。しかしこの書で彼の提起している題名の問題とそれに立ち向かう著者の態度は、ブッシュのような単細胞的、汎アメリカ主義的、キリスト教右派的なものではなく、また日本の一部の有機栽培農家の「ためにする」遺伝子組換え反対でもなく、アメリカの良心の一方を代表した紳士的かつ真摯なものである。文系の学生は最低一般常識として読んでおいて欲しいと思うが、薬学部の学生のように生命操作に熟達することが当然の立場の学生も、

それだけに世の中にはこういう立場の人間もいるということを知る上で有用であり一読に値する。

小生は、一日本人として、この書の前提となっている個人主義や魂の尊厳の問題など、「考えたくも無い」。多くの人々の原初的な助かりたい欲求を妨げ、或いは洗練するというより、「不死を売る人びと」「夢の医療」とアメリカの挑戦」 スティーヴン・S.ホール著 松浦俊輔訳 阪急コミュニケーションズ、にあるような治療を少しでも多くの人々に享受できるように努力したいと思う。

このような問題の背後にある技術革新を知るにはジェームス D. ワトソン 著 アンドリュー・ベリー 著 DNA 青木 薫 訳、講談社刊。(文庫版あり)がよい。「現実のものとなっている遺伝子操作技術が、遺伝子組み換え農作物や塩基配列特許、DNA鑑定等、今や我々の生活に密接に関わり、企業や国家に難しい問題だからとゲタを預けて済む問題ではなくなっていることを良く理解させてくれるし、そこまで至った生命操作の技術史が分かりやすく述べられている。」



小谷野 俊夫 国際関係学部教授

紹介図書名 新訂 福翁自伝
 著者名 福沢諭吉著 富田正文校訂
 出版社名 岩波書店
 ISBN 4-00-331022-5
 図書館所蔵 2階閲覧室 学生文庫
 岩文青/102/2

本書は幕末から明治後期にかけて、私塾を設けて若者に英語を教えるとともに、翻訳・著作等により西洋の事情を国民に知らせ続けた先覚者、福沢諭吉の口伝の自伝である。その語るところは、少年時代の中津藩の旧弊姑息な社会や、長崎や大阪で一心不乱にオランダ語を学んだことから、修得したオランダ語を捨て英語を独学で学んだこと、海外事情の紹介、晩年（明治34年）にいたる当時の社会の変貌の様、さらには、自らの処世の方針など多岐にわたっている。

私は、小学生高学年のころ、この本を子供向けに書き直した偉人伝により福沢を知った。丁度そのころ英語を習い始め、子供心に福沢が大阪の適塾でオランダ語を熱心に学んだ姿を思い描き自分

も英語を一生懸命勉強しようと思ったものである。その後、岩波文庫で原本を読み、興味の対象も幕末から明治維新にいたる社会の変化を彼がどのように見ていたか、当時の日本社会と西欧文明国との差はどのようなものであったか、などに広がっていった。

今読み返して面白いのはやはり彼の書生時代の生活である。また、当時と比べ現代社会の技術進歩には改めて驚かされる。例えば、当時は、外国書は極めて希少・高価であったため、写本をして学費を稼ぐ者がいた。今では外国書も高価ではなく、インターネットで早期に取り寄せも可能だ。

本書は語り口が軽妙で分かりやすく、物語の楽しみを十分に味わわせてくれる。



本学教員からの著書寄贈

先生方から著書を寄贈していただきました。（平成17年6月以降）
 図書館自由閲覧室の教員著作コーナーに配架して利用に供しています。

山田 浩 教授（薬学部）

「すぐに役立つCRC実践マニュアル」 静岡県薬剤師会・静岡県病院薬剤師会 2004年

「すぐに役立つCRC実践マニュアル 応用編」 静岡県薬剤師会 2005年

松田 正巳 教授（看護学部）

「いのちの地域ケア 第2版」 やどかり出版 2005年

宮崎 晋生 講師（国際関係学部）

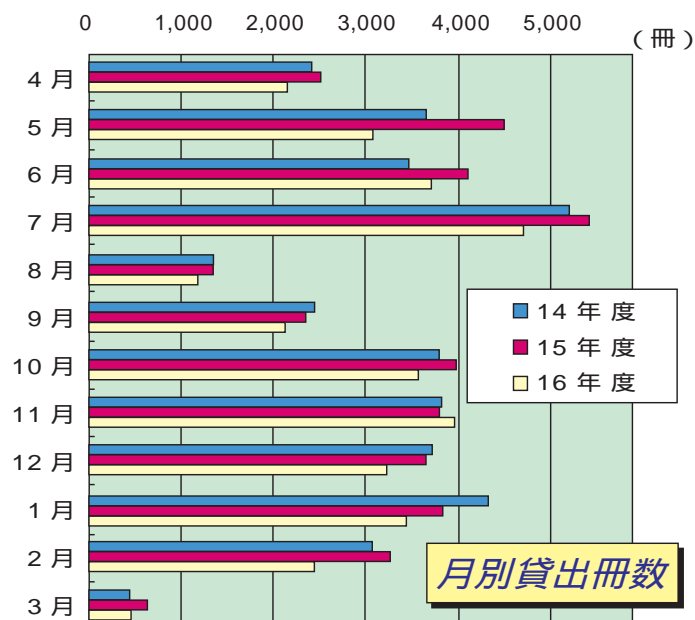
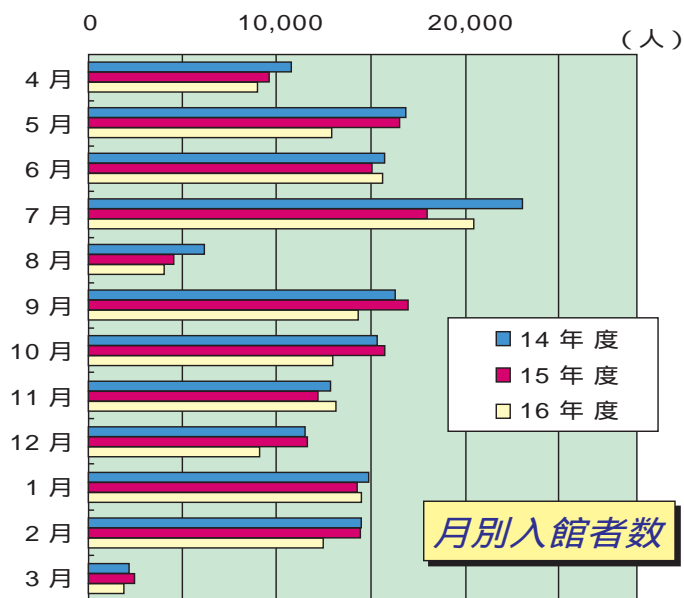
「ケースブック 日本のスタートアップ企業」 有斐閣 2005年



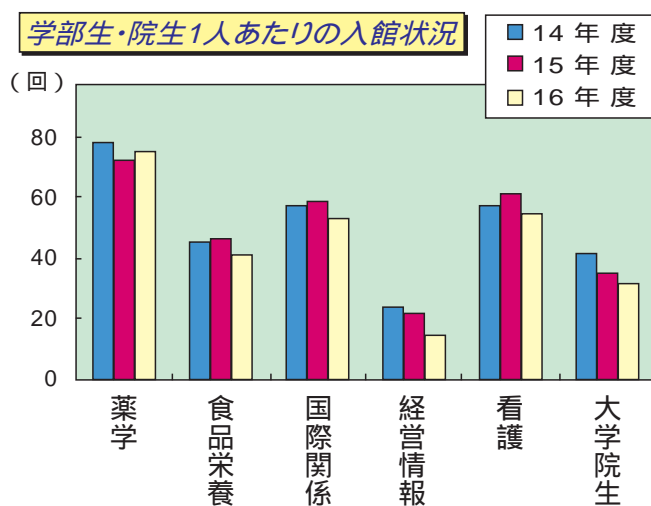
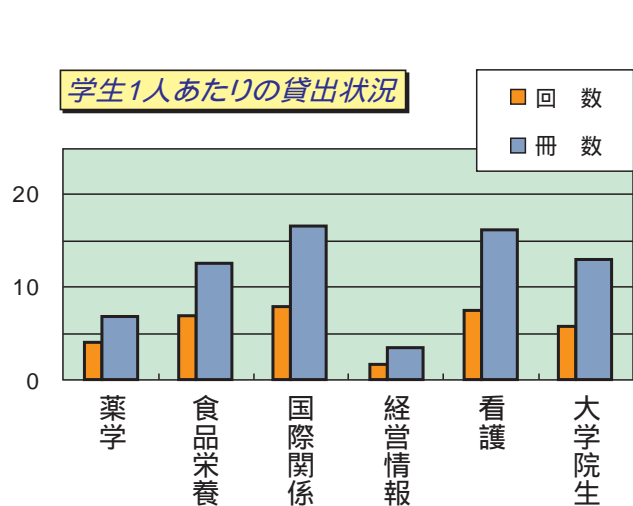
統計でみる附属図書館

平成16年度の利用状況を報告します。

入館者数(およそ7%)、貸出冊数(およそ12%)ともに前年度より減少しています。



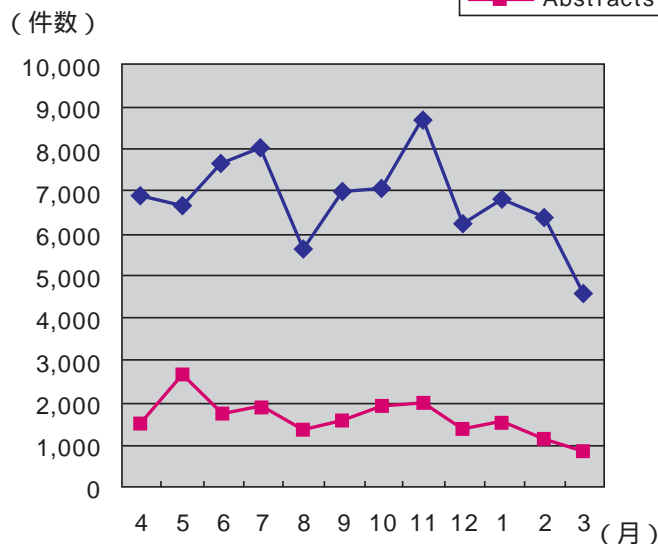
学生一人当たりの入館数も6.5%、貸出冊数がおおよそ 14%減少しています。



学生の一人当たりの平均貸出回数は5.7回
貸出冊数は11.5冊

蔵書数は、321,142冊となりました。今年度もいろいろな本を受入します。こまめに図書館1階の新着コーナーを確認してください。きっと興味を引くものが見つかります。

契約電子ジャーナル 利用状況



平成 16 年度は、一年間で85,286タイトルのフルテキスト、18,583件のアブストラクトが電子ジャーナルで利用されました。

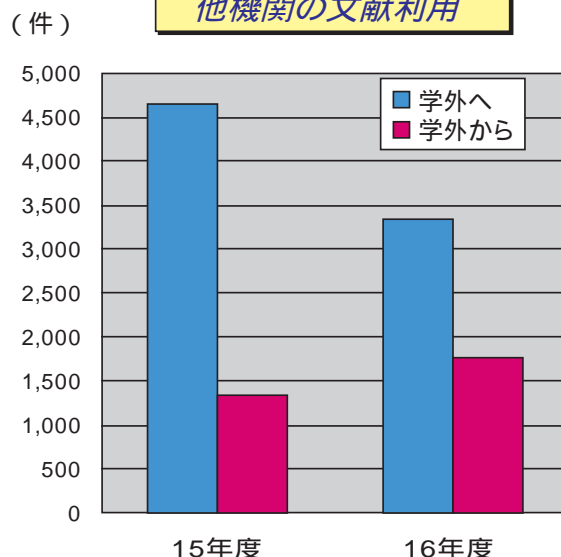
利用されたうち、Science Directがほぼ6割を占めています。

電子ジャーナルの利点は、冊子体より早く論文が読めることや直接図書館に来なくても読めることなど、です。

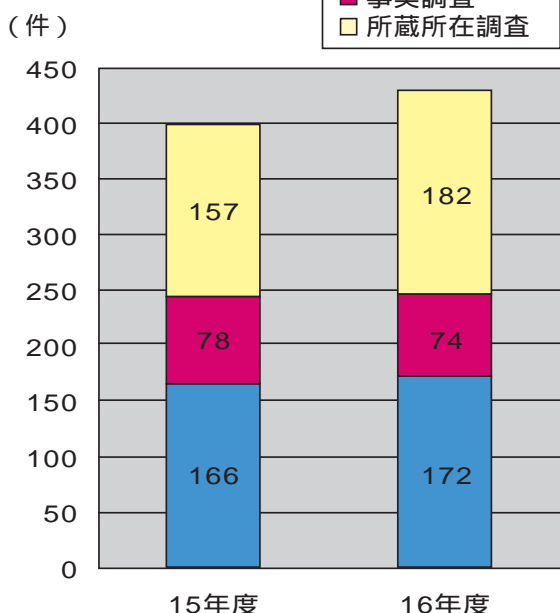
他機関の文献利用状況です。学外への依頼件数が減少し、学外からの依頼件数が増加しています。

ILL(相互利用)は、図書館カウンターで手続きを行えば、インターネット上で申込など行うことができます。

他機関の文献利用



レファレンス状況



入館者数が減少している一方で、レファレンス件数は増加しています。図書館を100%利用するために、わからないことはスタッフに確認することが有効です。

探している文献が見つからないとき、各種サービスの利用方法がわからないとき、図書館で疑問があったときはカウンターにいるスタッフにお尋ねください。

図書館をよよくご利用いただくために、いろいろな講習会を開催しています。新入生向けのものや卒業論文のための文献収集方法など、学生生活に役立つ情報が満載です。

開催のお知らせは、図書館掲示板、学内掲示板などと、図書館のホームページに掲載します。

ホームページアドレス:<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/library/>

携帯用アドレス(開館日程):<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp/library/m/index.html>

大学正面の『花滴々の碑』

県立大学管理棟入り口に、大学ゆかりの石碑や石柱があるが、そのひとつ『花滴々の碑』の背面に、建碑の由来が彫られていることを知る人は少ない。

この碑は昭和41年、この地に静岡女子大学ができる時、同大学教授・高原博氏が詠んだ和歌を刻んだものである。おもては次のとおりである。

この拓きし
丘に
はげしき
もの興ると
いふにはあらね
花滴々と
博



高原教授はアララギ派歌人で、歌誌『短歌個性』を主催して多くの歌人を育てた。

同女子大がこの時移転してきたのにともない、校内に咲いていた萩の花を詠んだもので、建てられたのは、昭和49年である。

背碑には、次のように記されている。

『碑背のかたるもの』

『ゆかりある人々の 心ここに 寄りよりて
この丘の この歌碑とはなりぬ

谷田風士記

本学名誉教授高原博先生 短歌個性を主宰し この丘に 花滴々の詠吟あり 登りくる茶畑の道 小 綏鶏の声夢さそふ みかへれば梶原山 もののふの 昔もあはれ 見はるかす谷田の丘辺ゆ 富士の嶺は 今日も美し ああこの拓きし丘に この歌碑は建つ きたりてここに いやさがたき 感懐(おもひ) は誰そ。

そもゆかりある人々 この碑の成れるは まさに 本学同窓会 = おほとり会有志七百余名 本学教職員 有志六十余名 短歌個性同人有志 広島大学尚志会 静岡県支部有志 静岡県教育研究所有志 静岡県学習研究会有志 本学後援会 ならびに島田市石音石材店等 もろひとの力による 記して永きかたみとも。

除幕にあたり 献詠の和歌三十余首 うち三首を 銘後に刻して碑背となす。

春(しゅん)日うらうらのひばり

秋(しゅう)日滴々の歌碑

去来幾多の人

むかし今人間と自然と

昭和四十九年四月二十一日

発起人 中川芳雄誌す』

『 献詠歌 』

ここにしてももの嘖嘖うつそみをよみがへり咲く花
滴々と 上條 彰次
ありなれてはや怠りのわが日々に灯ともすごとき
滴々の歌 高嶋 健一
花ひらく学びの丘の碑(いしづみ)に心通ひて過す
日のあれ 秦 鴻四

この碑はもともと経営情報学部の南側にあったが、県立大校舎建設のため体育館横に移され、現在地に再移転されたものである。『おほとり会』とは女子大同窓会で、いまも『はばたき寄金』に多額の寄付をいただいている。碑は本学の歴史と静岡県の文学を語る上で貴重なものとなっている。

(国際関係学部教授 高木 桂蔵)

学内ニュース「はばたき」への寄稿を大歓迎！

教職員・大学院生の皆様の受賞、研究助成への採択、学会・研究集会の案内、クラブ・サークル活動報告、ボランティア活動などの寄稿をお寄せください。大歓迎します。

事務局経営課・企画スタッフ(管理棟2階)あてにお願いします。E-mail:kikaku3@u-shizuoka-ken.ac.jp

企画・編集：静岡県立大学広報委員会(事務局 TEL054-264-5103)

静岡県立大学ホームページアドレス：<http://www.u-shizuoka-ken.ac.jp>